

2009年度FD・SD宿泊セミナー開催報告

首都大学東京管理部
大学教育推進担当課長 岩野 恵子

今回で3回目となるFD・SD宿泊セミナーを5月28日・29日に開催した。今回の統一テーマは「首都大学東京の第2段階FD・SDを目指して」。開学から5年目を迎え、これまで実施してきた基礎・教養教育の振り返りや今後に対する示唆に富んだ内容の講演会、ワークショップを実施した。

| －1日目－ | プログラム |
|-------|---|
| 講演1 | 公立大学の目指すもの 東京大学名誉教授 天野郁夫氏 |
| 講演2 | 首都大学東京の課題 理工学系・理工学研究科教授 大橋隆哉氏 |
| 講演3 | 全学共通科目のねらい オープンユニバーシティ准教授 保阪靖人氏 |
| 講演4 | 今日の学生気質 一学生対応をめぐる 学生サポートセンター相談課長 岡 昌之氏 |

| －2日目－ | プログラム |
|-------|---|
| 講演5 | 教職員協働による大学づくり 原島文雄 学長 |
| 講演6 | 首都大学東京 /765 ～大学教育改革を中心に～ 大学教育センターFD担当助教 串本 剛氏 |
| 講演7 | FDワークショップ 大学教員として備えておくべき資質 シラバスから成績評価まで 理工学系・理工学研究科教授 青塚正志氏 |



* * * * *

＜1日目＞

『公立大学の目指すもの』

基調講演として、東京大学名誉教授の天野郁夫先生に御講演をいただいた。講演では、公立大学がその誕生からどのような道を歩んできたか、その歴史を振り返りながら、今後は公立大学として、国立にも私立にもできない、“小粒できらりと個性の輝く大学”になるにはどうしたらよいのか、絶えず問うていくことが宿命と話された。

また、“大学とは教育の場である”という点から、大学の最大のステークホルダーは学生であることを指摘。高等教育機関の教育がこの20年くらいの間で一変し、学生に何を教えるか、カリキュラムの再構築が迫られており、また、いかに教えるかという点も非常に重要になっている。各大学でFD活動が実施されている背景の一つが、ここにあることも示唆された。

最後に、職員についても言及され、単に教員の仕事を補助するのではなく、支援、あるいは協働作業をする、イコールパートナーとしての職員の重要性の高ま

りを示唆された。（※講演内容の詳細はp29～39に掲載。）

『首都大学東京の課題』

「首都大学東京が目標とする教育と教育課程」という副題で、平成19・20年度の教務委員長の大橋隆哉教授は、基礎・教養教育における検討課題を話された。中でも、全学共通科目については、南大沢キャンパスで開講されているため、キャンパスが日野にあるシステムデザイン学部や荒川にある健康福祉学部は、履修計画が忙しくなること、再履修への対応などマルチキャンパスに対応した教育という点で検討が必要であることを指摘された。その他、単位制度の実質化、成績評価基準についても、今後に向けた課題として指摘された。

『全学共通科目のねらい』

続いて、平成20・21年度の基礎教育部会長である保阪靖人教授から、平成20年度に実施された全学共通科

目の一つである都市教養プログラムの改革についての話がされた。都市教養プログラムでは、各部局の負担の問題、教室の不足、また4つの系にわたり一つのテーマを履修する方式だと時間割の関係で履修できない学生がいる点などの問題点を指摘され、これらを解決するための改革の内容が話された。その他、全学共通科目には、いくつかの問題点が存在し、これらの問題点を教員全体で共有することが解決をスムーズにすることに繋がることを指摘された。

『今日の学生気質—学生対応をめぐる』

1日目最後のプログラムは、学生サポートセンター相談課長の岡昌之教授から、これまで学生相談の仕事をしてきた経験をもとに、学生に対するサポートのコツについて話がされた。現代の若者の精神構造は繊細でかつ複雑、多様である点を指摘。困難な状況にいる若者は、心の奥底では何らかの援助を求めている。その心のありよう、表れを感じ取る繊細さが援助者にも求められる。学生の発する言葉の微妙な味わいを大切にする、そこに会話のよりどころを発見していくことの大切さを話された。



《2日目》

『教職員協働による大学づくり』

2日目のプログラムは、原島文雄学長による講演でスタートした。

近代社会における大学の役割から、原島学長の研究内容、学長が歩まれてきた半生についてお話があり、“今後の大学改革に向けてともに頑張りましょう”という熱いメッセージが語られた。

『首都大学東京/765 ～大学教育改革を中心に～』

大学教育センターの申本剛助教から、大学の教員、職員として知っておくべき知識について、いくつかの論点から、他大学との比較も交えた講演があった。本学の歴史や予算規模、また平成20年12月に示された「学士課程答申」（中央教育審議会）で出されている、3つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの）の明確化、単位制度の実質化等、高等教育における課題が指摘された。また、このような高等教育政策の動向など、大学に関する知識を得ることは、教職員にとって大切であることを述べられた。

『大学教員として備えておくべき資質：シラバスから成績評価まで』

FD最後のプログラムとして、基礎教育部会の初代基礎ゼミナール部会長で、平成17年度から2年間、基礎ゼミナール立ち上げに尽力された青塚正志教授を講師に迎え、ワークショップを行った。「シラバスの目的と意義とは?」「受講生は授業においてどのようなことに不満を抱くのか?」「受講生が納得感を持つことができる成績評価とは?」など、講師からの投げかけに対し、会場から様々な発言があった。講師からは、授業評価アンケートの結果による学生の姿なども示され、それらを基に、参加者との活発な意見交換が行われた。

2日間にわたるセミナーは、これらのプログラムのほか、1日目の夕食後に懇親会が行われ、普段ゆっくと話をする機会の少ない教員と職員、他キャンパスの職員が交流する機会ともなり、有意義なひと時を過ごした。

